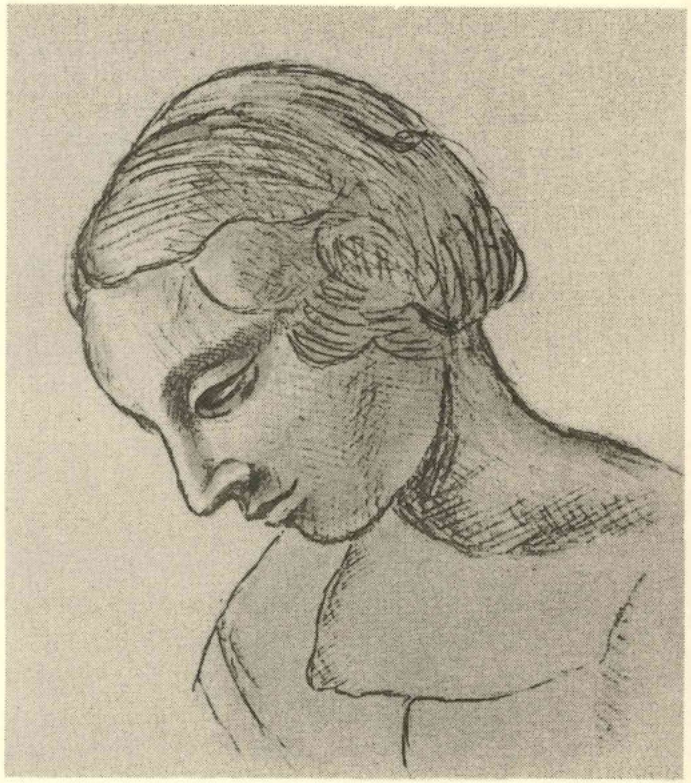
季刊

四季

秋季号 4



四季社

一九八四年十一月三日発行

定価 四〇〇円

目　次

ダヴインチ「女の頭部」…… 小高根　太郎模写　表紙
わぎもこ …… 堀　辰雄　表紙裏
鸚　鵡 …… 植村　清二　2
淋しき塔 …… 浅野　晃　4
月夜（杜甫） …… 松枝茂夫訳注　6
学問としての文学とは人間学 …… 高田　瑞穂　8
秋の一日，北京で「赤とんぼ」を聴く …… 山住　正己　11
書齋慢談（4）…… 矢野　峰人　13
小さい者 …… 坂口　允男　18
カタストロフィ …… 小高根太郎　20
きのう，今日 …… 小杉　茂樹　22
雑　詠 …… 河村　純一　24
悲しい月 …… 田中　克己　26
青い月 …… 江頭　彦造　28
烏 …… 福地　邦樹　30
花咲町の秋 …… たかはし　しげおみ　32
白　夜 …… 大野沢緑郎　34
八幡山情景 …… 国友　則房　36
からすうり …… 花井タヅ子　38
同人名簿 …… 40
同人略暦 …… 41
同人規定・会員規定 …… 42

わぎもこ

堀　辰雄

妻の母方の祖父は、土屋彦六といつて、明治のころ、静岡で牧師をしてゐた。なんでもその祖先は義士討入で有名な土屋主税だといふ話を、私は妻の母から聞いたことがある。このお正月に、ラジオで、吉右衛門の「松浦の太鼓」をききながら、この松浦侯といふのはおまへの祖先の土屋主税をモデルにしたんだよ、と言つても、どうも妻には一向ぴつたり来ないらしかつた。それもその筈だ。なにしろ、父の勤めの都合で、香港や廣東で幼時をすごし、それからぽんと東京のミッションスクールの寄宿舎に入れられてしまつてゐたのだから……

もう足かけ九年、こんな信州の山のなかにこもつて、何ひとつ厭な顔をせず、寝たつきりの、めんだうな私のおつきあいをして貰つてゐるのは、なんとしてもありがたいことだ。

（「週間朝日」昭和二十七年三月二十三日号）

鸚鵡

植村清二

生来語学が不得意で、中学の英語も、高等学校のドイツ語も、みな危い綱渡りであった。大学に入ると、その頃は前期、後期の外国語が必修で、その単位の取得が、論文提出の條件であった。顧みて英語もドイツ語も気が進まず、初歩から教わるというのを頼りにして、フランス語を選択した。その心がけが良くない。

先生は訳読は豊島与志雄さん、和文仏訳は暁星中学のヴイグルスさんだった。豊島さんは前期にはマーテルリンクの「室内」（ランテルール）と「盲人たち」（レーザヴューグル）を、後期にはフローベールの「三小品」（トロワ・コント）の中の「単純な心」（クール・サンプル）と「サン・ジュリアン」を教科書とした使った。マーテルリンクの文章は、簡素でセンテンスが短いが、独白や対話が多いから、なかなかむづかしい。フローベールはまた出来ない学生にも、鏤骨の名文というものが、おぼろげに感じられる文章で、これも骨が折れた。

後期には僕の隣の席に、いつも高橋邦太郎君が坐っていた。高橋君は外国語学校を卒業してから、大学に籍を置いていたので、どうして豊島さんの訳読に出席していたのか、今でもわけがわからない。僕は、鷗外に「サン・ジュリアン」の訳のあることを、この人に教えてもらった。しかし豊島さんの訳でわからないところをたずねると、

「鷗外はえらいですな」

とばかり言って、質問に答えてくれないのには困った。

十年ほど前に、パリからセイヌに沿うて下って、ルーアンを訪うたことがある。大御堂や、ジャンヌ・ダルクの火刑の場所などを、型通りに見物して、少し時間に余裕があったので、コルネイユとフローベールの二文豪の生家をおとづれる。

コルネイユの生家は、街路に面した四階建の家屋であるが、フローベールの生家は、市立病院の構内にある官舎の一部分である。フローベールの父は外科医だったので、鋏やメスや鉗子などの器具が、沢山陳列されている。ふと見ると、一羽の鸚鵡の剝製がある。「単純な心」の女主人公のみとれていた鸚鵡に違いない。僕は心の中で小さい叫び声を上げると共に、目の前に五十年前のフランス語の教室の光景が、浮かんだ。

淋しき塔

浅野　晃

——チェルさんだね
——何者だ
——主(しゅ)だよ
——主だと　ウソだ
——ウソはお前さんとこのお家芸だ
　大韓航空機の撃墜もウソで片づける気だね
——あれはスパイだ
——お前さんも人の子だろう　父母もあれば妻子もある　遺族の
　悲しみが分らないのかね　一言悪かったといえないのかね

——ウルサイ
——あれを御覧　墜とされた筈の飛行機が　お前さんを迎へに来
　ている　どうしてものせてゆくといっている。

　ジェット機の爆音
——曲者だ　出合へ　出合へ
　護衛隊一斎にかけつける
　はげしい爆音　しづかな歌声——
「夕日の影はクレムリン
　なれが淋しき塔の上
——晩翠だな

月夜（杜甫）

松枝茂夫 訳注

七五六年、安禄山の叛軍に捕えられ、長安で軟禁されていた時の作。
秋の月を眺めつつ、はるか鄜州羌村にいる妻子の上に思いをはせる。

今夜鄜州月　今夜鄜州の月、
閨中只獨看　閨中に只だ独り看ん。
遥憐小児女　遥かに憐れむ　小児女の、
未解憶長安　未だ長安を憶うを解せざる。
香霧雲鬟濕　香霧　雲鬟湿い
清輝玉臂寒　清輝　玉臂寒からん。
何時倚虚幌　何れの時か虚幌に倚り
雙照涙痕乾　双び照らされて涙痕乾かん。

今宵、鄜州の上に照る月を、おまえは部屋の中でひとりさびしく眺めていることだろう。かわいそうに、頑是ない子供たちは、はるかに長安にいる父親のことを思うすべすら知るまい。かぐわしい霧に、おまえの黒髪はしっとりとぬれ、清らかな月の光に、白い玉の腕は冷たく照らされていることだろう。ああ、いつになったら、人気のない帳に寄り添って、おまえとふたり月の光に照らされて、涙の乾く日がくるだろうか。

〔鄜州〕今の陝西省鄜縣。杜甫は妻子を鄜州の羌村に疎開させていた。〔雲鬟〕鬟はまげ。婦人のゆたかな髪の形容。〔玉臂〕臂は上膊部。婦人の美しい腕の形容。（岩波文庫『中国名詩選』（中）より転載）。

学問としての文学とは人間学

高田瑞穂

私が成城学園中・高の教諭となったのは昭和二十一年、二十九年成城大学設立と同時に、成城大学文芸学部教授として、それから五十六年三月まで勤務を続けたのであった。その間不断に国文学専攻の学生たちに告げ続けたことの一つは、本当に読んだ本、本当に興味深い本とは、自分の血となり肉となった本、血肉化した作品とは、その作中の一句が、不断に自分の生の支えとなっているものである。そういう本、作品が幾つあるかということであった。こう聞かれると学生、殊に今日の学生たちは首を傾ける。そういう学生たちに私は、自分の体験を告げる。例えば次の如くである。

「取らねばならぬ経過は泣いても笑っても取るのが本統だ……」

これは、志賀直哉の唯一の長編「暗夜行路」の主人公の告白である。この信念に即して生きた、正に「時任謙作」である主人公が、直哉の分身であることは言うまでもない。直哉は、本当に書きたい時書き、書きたくない時は決して書かないという態度を一貫した作家であった。芥川龍之介は、死を

決意して書いた評論「文芸的な、餘りに文芸的な」の第五章「志賀直哉氏」において、「志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。」と告げている。「暗夜行路」の右のことばは、私の内に長く生動を続け、私は自らに、無埋や、飛び越えを許さなかった。それが私の生の重要な一支柱であった。それと並んで、夏目漱石の「それから」の一節も、私の生を支えた理想であった。

「代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり考へたりするのは、歩行と思考の堕落……」

こういう主人公代助の生に大きな感銘と共感を持った武者小路實篤は、既に幾つかの作品があったのに『白樺』創刊号に「『それから』に就て」を掲げたのであった。最晩年の志賀直哉に、「週一回、少くとも月一回は来なくてはいけない」と命ぜられて伺い続けた私に告げられたことは、ほとんど漱石への思慕であった。私にも代助の右のことばは滲みついて、それが私の生を支えてくれたのであった。

もう一つ、これは森鷗外の「妄想」という作品を通じて知った、ゲエテ晩年の訓辞、それを引く。

「奈何(いか)にして人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらん。されど行為を以

てしては或は能くせむ。汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の價値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」

この「日の要求」ということばも、私の内に生動を続けた。殊に五十過ぎの私は、一日も講義を休まず、一日も遅刻しないことを旨とした。鐘が鳴った五分過ぎには、必ず教室の壇上に立て！　私は自分にこう命じ続けたのであった。そしてこれが私の教師生活に一つの意義を与えてくれたのであった。

短い文章なので、解りにくいかも知れないが、これで大体「学問としての文学とは人間学」の意味が解ってもらえると思う。最後に既に数えて七十五歳の小生の今日の生の支えとなっていることばを引いて筆を置くこととする。大先達の次のことばを私は色紙に書いて書斎に掲げている。

有朋自遠方来
不亦楽乎

これは『論語』の「学而第一」に記されている孔子のことばである。

春風無遠近
吹到野人家

これは、漱石の漢詩「春日偶成」其四の後半である。

錯雑した一文をこれで終ることとする。

秋の一日、北京で「赤とんぼ」を聴く

山　住　正　己

昨秋、中国を訪ねたとき、北京の鉄路職工子弟第七小学校で、子どもたちが日本のテレビ劇画ジャングル大帝の主題歌「レオの歌」（中国では――「雷欧之歌」日本動画片「森林大帝」主題歌――と呼ばれていた）とともに、三木露風作詞・山田耕作作曲「赤とんぼ」（中国語訳の標題は「紅蜻蜓」）をうたってくれた。この「紅蜻蜓」の全文は次の通り。

一、晩霞中的紅蜻蜓、請休告訴我、
　童年時代過到休　那是那一天？
二、拿起小籃来到山上、来到桑田里、
　采到桑果放進小籃、難道是夢影？
三、晩霞中的紅蜻蜓呀、休在那里約、
　停歇在那竹竿尖上、是那紅蜻蜓。

この学校は鉄道関係労働者の子どもたちが通う学校であり、北京で外国の客を迎える小学校の一つであった。外国人が来校したとき、どこの学校でも、すぐにその国の歌を子どもたちがうたえるわけではない。しかし、やがてはさまざまな国の音楽を、さまざまな楽器を使いながら歌い奏することができるようにしたいのだろう。

私は、すばらしい季節の一つとして世界的に有名な「北京の秋」の一日、思いもよらず、「赤とんぼ」を中国語訳で聴くことができた。中国の子どもたちが、この歌をみごとにうたいこんでいたのにはびっくりした。

しかし一つ残念なことがあった。三番の「十五で姐(ねえ)やは／嫁に行き／お里のたよりも／絶えはてた」が抜けていたことである。三番を抜かしたのでは、この歌の主題が変わってしまうということは、指揮をしていた教師に伝えた。

三番が抜けていることが多いのは、日本の教科書である。これは、三番の内容が子どもに読ませ、うたわせるのにふさわしくないという「教育的配慮」によるものであろう。日本の教科書では、このような愚にもつかぬ「教育的配慮」のせいで原作の持ち味が台無しにされてしまうことが多い。その教科書を中国の人が見て、翻訳をしたのだと思う。秋の代表的な歌の一つである「赤とんぼ」も原作を尊重しながら、うたいたいし、外国人にもうたってもらいたいものだと思った。

書齋漫談（4）

矢野峰人

このワイズ氏の文庫は、屢々亜米利加の富豪あたりから、値段にかまわず、ぜひ譲れなどと申込まれるらしいが、先生頑として應じない。

ところで、僕は、或は何とか紹介される方法も無いではなかったのに、墜にこの名文庫を訪づれないで帳って来たのは、如何にも残念な次第である。尤も、このワイズ氏のアシユリイ文庫の寫真は、『愛書(ビブリオファイル)』と題する彼地の雑誌の挿畫で見た事がある。言ふ迄も無く、堂々たる圖書館の書庫風に出来たもので、所謂書齋とは全然趣を異にせるものである。

寫真で見た藏書家の中で先づ第一に指を屈すべき人に、亜米利加のルイス・アンタアマイヤアという詩人が居る。詞華集の編纂者として我國にも相當その名を知られて居る人であるが、この人は、自分の家を『書物の家(ハウス・オブ・ブックス)』と呼んで居るだけあって、千八？百何年以後英米に於て出版された詩集という詩集は何一つ洩らさず藏して居るとの事である。寫真で見るとなるほど、その書庫は全く大き

な圖書館の内部そっくりである。何とも驚き入る次第であるが、その集め方が、如何にも金に飽かせて無差別に集めたやうで、少々反感をそゝられる。

大體蔵書などといふものは、何も冊數——即ち量を誇るべきものでなく、全くその内容、質、即ち如何にそれが精選された蒐集（コレクション）であるかを尊重すべきであらう。

斯うした意味で、僕は此の頃の日本の古本屋や、古本蒐集家の態度に頗る慊らないものがある。これも一種の狂的な流行——一體流行といふものはすべて狂的なものであるが——故、致し方もあるまいが、猫も杓子も初版々々で法外な値を呼ぶのは、全く恐れ入るの外無い。この調子で行くと、どんなつまらない本でも、初版本だけはいつかは値が出るだらうから著者たるもの、或は出版者たるもの安心して可なりと言ひたい。

我國で今、斯ういふ事をやつてゐる古本屋があるか如何か知らないが、外國では珍らしからぬ事に、次のやうなやり方がある。一種の投資なのだが、何か限定版が出ると、何十部か、古本屋が一手に買ひ占めて置く。そして、その限定版が盡き、これに對する世間の要望が漸く高まるに至つた頃になつて、徐にこれを賣り出す。だから、結局ぼろい儲けをするのは中に立つた古本屋だけで、そのお蔭で高い本を買はされる讀者こそ好い面の皮である。

今、我國の古本屋に対する愚痴が出たが、台灣のやうな遠隔の地に来て見ると、つくづく我國の

古本屋に所謂古本屋道徳の無い事を嘆かはしく思はざるを得ない。たとへば、久しきに互って探しして居る本のリストを、わざわざ印刷などして諸方の古本屋に照會し、入手の節は一報を乞うておく。然るに、彼等はわれわれの依頼状が届いた時にその書物が彼等の手許に無い限り、たとひその直後にこれを入手しようと、特にそれをわれわれに報知するだけの勞を取らないのである。十日や二週間は手許において、一應われわれに照會位はしてくれてもよさゝうなものだと思う。さうした點になると、外國の古本屋、殊に大きな店になる程感心なものである。たとへば、倫敦のマツグス・ブラザアスなどは、あの堂々たる目録を見ても直に知られるやうに、大規模な商賣、殊に亜米利加人を相手にやって居る店だから、われわれ貧乏書生の五圓や十圓——いや、それにも満たないやうな買物には、実際一顧の注意だに拂はなくつたつて仕方が無いのであるが、それが如何だ。五年も六年も前に「若しこの本が出たらたのむ」と一言頼んでおいた、五志六志の書物に關してでも、其の時の約束依頼を忘れずに、わざわざ知らせて来るでは無いか。この點は、日本の古本屋も少々見習つて貰ひたいものだ。遠地の顧客に徒に電報料の浪費のみか失望を新にさせるのは、あまりに浅ましく、罪が深すぎる。

今更こんな事を言つても致し方の無い事であるが、台灣は愛書家の来るべき所では無い。古本屋の無い事は當然であらうが、新刊書だつて碌々見る機會は無い。時偶註文しても来る事もあれば、

全く來ないで終る事さへ珍らしくない。新刊書が容易に見られない事も假に我慢するとしよう。然し、あの黴の仕末と油蟲の防禦とに要する苦心は如何だ。書物によると、實際毎日黴を拭かねばならないものもあるのだから閉口せざるを得ない。濕氣を恐れて幾分陽光の入り易い室に置かうものなら、それこそ三日經たないうちに變色褪色と來る。斯うなるといよいよ何とかして藏書に適した書齋が欲しくなつて來ざるを得ない。

書物の保存より何より、われわれ人生の大部分を書齋裡に送る連中にとつては、少しでも意に適つた室が欲しい。殊に僕などと來たら自分の書齋で、自分の机で自分の書物を讀まないと、てんで頭に入らぬといふ厄介な性分なのだから、何と言つても欲しいものは書齋である。僕も台灣に來て以來實に頻々転居した。これを目して僕の飽性と嘲ける人もあるが、正直なところ、あれは書齋を追うて居を移したに過ぎない。そのためには随分苦勞もし馬鹿な犠牲も拂つたわけだが、これは埋想主義者にとつては、免れがたい運命である。

一體僕は卓子でないと勉強出来ない質なので、そのため洋室のある家を始終探したものである。然しどんな家だつて蔵書全部を入れ得るやうな大きな室のある家があらう筈はない。そこで、出来るならば、應接室と書庫と書齋と、この三つが相隣つた家を探したいといふのが僕の念願であつた。

然し、普通の借家にそんな學者向きな建方をしたものがある筈が無い。大體台灣の借家に、書齋用の室を特に用意したものが一軒でもあるか。若し、ありとすれば、それは應接室兼用のもので、何の事は無い、主人公を玄關番にするだけの役しかないものである。恐らく官舎だつて然うだらう。

理想的な書齋？さア、時に空想しないでもないが、はつきりと考へて見た事もない。そんな事は、も少し名家の書齋でも澤山拝見した上、徐に考へて見ようではないか、都合では「書齋を語る」座談會でも開いて見れら如何だ？寫眞の持寄も夏向きで結構だらう。だが、まア、解けないうちに氷菓子でもやりたまへ。

（了）

小さい者

坂口允男

小さい者とは何だろう
体(からだ)が小さいのか、力が小さいのか
幸いが小さいのだろうか。
それにしても大いなる神の前では
人間はすべて小さいものではないか。
その通りにちがいない。
しかし小さい者どうしの間で
やはり大小の別がある。

大きさを誇る傲慢がある
小ささを誇る卑下慢もいる
ほんとうに小さい者とは
苦しんでいて、その悩みから
抜け出す力がいちばん小さい者なのだ
さすれば今アフリカで飢えている
数千万の人々！
彼等こそ世界のもっとも小さい者だ
イエス・キリストは仰せになる
「これらのもっとも小さい者に対して
する事は私にするのである」と

カタストロフィ

小高根　太郎

まっ黒な氷河に被われた地球が、
のろのろと太陽のまわりを回転している。
一年三百六十五日――
けれど、もうそこには、一匹の羽虫さえ飛んでいない。
カインの血をひく人間たちが、
たがいを憎みあい殺しあって、

ついには生命あるすべてを殺戮してしまった。
み使いたちは黒こげの地球を追って天翔けり、
潰えた主のみ業をなげいて号泣し、
地獄の悪魔たちは小おどりして
勝利のかちどきをあげて主をののしる。
そして創り主の神は――呆然と途方にくれているばかり。

きのう、今日

小杉茂樹

コックを捻ると　火が點くご時世

することがなくて
薪を　こしらえる
この薪の炭が亦気に入って　昨日も
…おや備長炭だわ
お隣りの細君が　おだてる
あとで　念入りな粥ができた

炭は　杉　檜では駄目
小楢か櫟　樫に限る
こんどは　姥女　だ　それも世に拗ねた図太い痴れ者で

薪に挑む
重く　鈍い刃の丸い斧でだ
打てば単純明解答がでる

雑詠

河村純一

山なみの迫るを見つつ居眠りき
目ざめたるとき山やま遠し

山やまの名を吾知らず修験者の
飯道山（はんだうさん）は山向うなり

人待ちて本を讀む間の静けさに
隣家の犬が吠えつづけゐる

人待ちて待てど来らず「対談」を
よみはじめしが讀み終りたり

朝妻の入江田の道急ぐなし
行くを塞ぎてショベルカー動く

猿沢の池のほとりに突風が
わがアイスクリームの雫（しずく）を飛ばす

眉寄せてうすくらがりの堂のなか
千二百年の長きまなざし

（興福寺　阿修羅像）

悲しい月

田中克己

九月は悲しい月である。
二十二日に女児出産、いつもの通りの安産で
兄につづけて弓子と命名したあと
次男の梓が二十四日朝ひきつけ
「オバアチャン」と一語して昏睡
あわてて近所の女医を呼び
手当したが効なく翌日避病院に入院
ここでも女医の手当を受けたが夜半絶命
十六年九月二十一日に生まれて満二歳と数日であった

翌日、上落合の火葬場でわたしは柩によりかかって哭するのみであった
わたしはそのあと笑わなくなり
死ねば会えると願ったがどこで会うつもりだったやら
いまは浄罪界でゆるされて天国へ来るのを待っている。
遺骨は八王子の上川霊園にあり
わたしは教会の墓地に入るが
彼の入っている田中家墓地にも分骨してもらう
九月は悲しい月である。

青い月

――クアラルンプールにて

江頭彦造

――マレー人　八割　中国人　印度人たち，…

朝早く　ゴムの木の　皮に
小さな傷を　つける
一時間　ぽとぽとと　垂れる
白い　液汁

水場　子供たちの　泥んこの
飛込み　喚声！
乾ききった　裏庭　おどけた　ピエロ
猿　駝鳥

白日
軽羅の　モスクの　祈り！

果物の王　マンゴオの　木蔭
男の児に　数学を　教える
ドライバーの　父の　髭

夕べ　スコール！

満々たる　海上
ああ
はろばろ
　　青い　月！

烏

福地　邦樹

私の勤務校は、大阪の東の郊外の四条畷にある。楠正行の戦死の地で、飯盛山の麓である。その飯盛山を歩くことが時にあって、近頃烏の多いのに驚かされる。山

肌をあらわに土砂を削り取られた所が不法ごみ捨て場になっていて、生ごみの中に食い物があるのか、烏が異常に繁殖している。平安の昔、死者を山に捨てた頃もこうだったのかと思わせる不気味さである。近づくとバサバサ大儀そうに飛び立ち、少し離れた崖の上から呵々と鳴きながら、こちらを観察しているのだ。

そして夕暮どきになると、五十米もある高圧線の高みに、百羽も二百羽も夕陽に向かって並び、下界を見下し、一日の無慙を振りかえって静かな安らぎの時を過ごす。私達がビルの最上階でコーヒーを飲むように。寺の方丈に坐って、客の帰ったあとの庭を眺めるように。それから、太陽が沈むのを合図に、ねぐらの雑木林へ胡麻塩をふるように降下してゆく。

花咲町の秋

たかはし　しげおみ

ベイジン御滞在中のロオン先生　ごめんなさい
お留守中の　御宅の栗を無断で頂戴いたします。
落ちてはじけたのか　はじけておちたのか
パックリひらいたイガ栗　三つ四つ五つ

のびすぎた芝の　露しげしげしい中に
生まれたばかりのように　光り輝いている。

ご近所のリスも野うさぎも　今朝は
まだお出ましではないようで。

ロオン先生の前庭には大きな栗の木
だから秋はマロン先生――だが今年は
ミセスマロンのお手焼きはいただけないので

ぼく、自分ひとりで焼いてみます
あんなにうまい具合にはいかないでしょうが。
先生は今年、本場の秋でいいですね。

白夜

大野沢　緑郎

このひろがりのいたるところに
多かれ少なかれ埋まっている
すべての墓標なき
墓標はいつまでも消えはしない
残光のなかにほのじろんでいる
そして　夕立のあとのみどりが
うつくしく照り映え　かげる野や林が
宇宙物理の法則のまま
いつまでもほのあかるい
生きていることがわれわれ捕われの

不自然にながい夏のひるを
つぎの早い朝あけにつなぎ
つかのまのねむりのあと
またつぎの思考にひきつがれる
だがそのつかのまのながい日日は
またたくまにをわる
おそくまでそしてはやいくらやみがまた
あのおそろしいマローズの日を
もうすぐそこにちかづけている
いま　ひかりはながくても
やすらいはつねにみじかく
ひるでない夜の　薄明がたちこめ
影法師ばかりがいたずらにながく尾をひく
北の曠野の丘に
その白夜のなかに
たたずんでいる

――マローズ＝零下三〇～七〇度の寒気（ロシア語）

八幡山情景

――組合短大の頃――

国友則房

八幡山の　バス停で
買物籠を　ぶら下げた
中年の女が　近づいて來た。
――バスは　来るでしょうか？
軽く　会釈しながら　私は答えた。
――わたしが　ここに待っているので
來ないってことも　ないでしょうよ？

彼女は　じっと　私を見返した。
その顔には　〃この人は　野暮天の教師だよ〃
という侮蔑の色が　讀み取れた。
淺黒い　肉のしまった
鷹のような　鋭い目付の　女であった。

そのうち　世田谷の区劃整理で
八幡山の　バス停が変ったら、
彼女の姿は　急に　見えなくなった。
この広い　人間砂漠の　真中に！

からすうり

花井　タヅ子

老いた庭師さんは
庭のあちこちにひそんでいた
小悪魔どもをかき集め
大きな袋につめ込むと
リヤカーにのせて運んで行った
昏れると
ひっそりと開くからすうりの白い花

レースとレースでつながれた
花びらの妖しさ
それもみんななくなって
人間を侵そうとしていた
植物の勢いはもうどこにもなくなって
そっけなく立って
初秋の風がゆききする
こおろぎだけはその鳴き声を止めないで
鳴きつづけている
なんだか背中のあたりが
寒くなって来たねとつぶやきながら。

同人略暦 (1)

植村清二

明治３４年　大阪市に生まる。府立天王寺中学，山口高校卒。
大正１４年　東京帝国大学文学部東洋史学科卒業。
昭和　３年　旧制松山高等学校教授に任官。松本善海，松本新八郎などを教う。
昭和１６年　旧制新潟高等学校教授に転任。
昭和１９年　『萬里の長城（創元選書）』刊行。
昭和２４年　国立新潟大学人文学部教授に任官。
昭和３１年　『アジアの帝王』（洋々社）を刊行。
昭和３２年　『神武天皇』（日本歴史叢書）至文堂より刊行。
昭和３７年　『楠木正成』（同上）。
昭和３９年　『諸葛孔明』（グリーンベルト・シールズ）筑摩書房より刊行。
昭和４０年　『教養としての中国史』（講談社現代新書）を刊行。
昭和４１年　国士館大学文学部教授となる。現在同大学特別客員教授。
昭和４２年　『萬里の長城』（文芸春秋社大世界史３）を刊行。
昭和５２年　『歴史と文芸の間』（中央公論社）刊行。

淺野　晃

明治３４年８月１５日生。石川県人
大正　３年　東京府立１中入学。同級の蔵原惟人，飯島正と廻覧誌『リラの花』を出す。
大正　８年　飯島と共に三高文丙に入学。同期の中谷孝雄，梶井基次郎，大宅荘一，山口誓子，小島吉雄，北川冬彦らと相知る。斎藤晌，小方庸正，河盛好蔵らと三高詩会を創める。
大正１１年　東大法学部仏法科入学。新人会に入る。川端康成の後をうけて第７次『新思潮』を創める。（同人は大宅，小方，飯島のほか，小松清，村井康男，伊吹武彦，水野亮，手塚富雄など）。
大正１４年　東大卒業，産労に入り，水野成夫と相知る。のち労農党本部書記。共産党に入党。３．１５事件で未決に入り，昭和５年保釈出所，解党派運動に挺身。
昭和　９年　ショウペンハワーによってマルクスから離脱。
昭和１０年　北川の『麺麭』に入り，文学へ帰る。分離公判にて執行猶予。
昭和１２年　新日本文化の会に加はり，保田与重郎と相知る。佐藤春夫に師事。
昭和１６年　陸軍宣伝班員としてジャワ遠征に従軍。
昭和２４年　保田の『祖国』に寄稿。
昭和２８年　『文芸日本』復刊。
昭和３０年　立正大学文学部専任教授となる。国文学担当。（５１年定年退職）。
昭和３１年　田中克己，小高根二郎の『果樹園』に参加。

同人名簿

（順不同）

~~*植村清二~~	176	練馬区桜台６－８－５
~~岩崎昭弥~~	502	岐阜市近島２３２
石山直一	559	大阪市住之江区住之江１－３－１０
*牛尾三千夫	694	島根県邑智郡桜江町市山４７４
~~*小高根太郎~~	156	世田谷区桜１－６３－６
高橋しげおみ	632	天理市三島町１００
福地邦樹	578	東大阪市新庄２４１－１７
江頭彦造	167	杉並区下井草２－１６－１２
川村欽吾	036	弘前市豊原２－３－３５
*小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津７６２－２
伊達温	565	吹田市尺谷２４－５
*野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町５
坂口允男	630	奈良市高畑大道町１２３２
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲寺前町７０７
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江２－５－６
*松枝茂夫	167	杉並区本天沼２－３７－２１
山住正巳	166	杉並区阿佐谷南１－３８－２
~~*藤澤桓夫~~	558	大阪市住吉区上住吉２－１２－４
~~*高田瑞穂~~	157	世田谷区成城２－４－２０
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町９１４
*矢野峰人	158	世田谷区深沢２－１４－１７
*浅野晃	151	渋谷区本町３－３２－１－１００４
（田中克己）	166	杉並区阿佐谷南１－４０－８
*河村純一	522	彦根市中央町７－５
高橋渡	158	世田谷区奥沢１－６３－５
花井たづ子	176	練馬区旭丘２－３６
大東幸子	574	大東市諸福３－６－１０
大野沢緑郎	235	横浜市磯子区上中里町１０２８－３－３１１
藤野一雄	522	彦根市本町１－８－２７
~~森亮~~	572	寝屋川市木屋町１０－１８
国友則房	184	小金井市本町３－１－２０

（＊は名誉同人）

美しさへのマイウェイ

双美人

明治36年
双美人マークのクラブ化粧品が
創業いたしました。
以来、80年にわたり
皆さまに愛されてきた
クラブ化粧品が
動植物エキスを配合して
つくりあげたフルベール。
今、双美人マークは
フルベール化粧品の
シンボルマークです。

フルベール化粧品®
本社 大阪市西区西本町2-6-11
〒550 電話(06)543-0077

（同人規定）

1．同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び，毎号のせることとする。

1．老大家※以外は同人費として投稿毎に2,500円（送料共）を納めること。

1．なるべく常用漢字，常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）

1．当雑誌を各方面に広く配布してもらい，売却金を刊行元に送金（郵便振替　東京８－１３２９２４四季社）してもらいたい。（送料引）

1．同人に適当な人があれば紹介してほしい。

（会員規定）

○ 会員は男女職業年齢を問わない。
旧『四季』を閲覧し，堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。

○ なるべく常用漢字，常用かなづかいを用い，創作であること（２ページ分が望ましい）。

○ 会員費として４ケ月分2,０００円（送料２００円）を，振替東京８－１３２９２４　四季社まで納入してほしい。

○ 同好者を誘ってもらいたい。

季刊 四季 第四号　定価400円（送料200円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南１－40－８ 田中克己方
電話　03（314）２７８３

印刷　スバル ライフサービス
〒167　東京都杉並区松庵１－１７－５
電話　03（333）3959